

心理臨床家のプロフェッションの生成と継承¹

—専門性のなかに個人的資質がいきること—

上手由香・岡本祐子・奥田紗史美
前盛ひとみ・深瀬裕子・神谷真由美

本研究は、一人の心理臨床家のプロフェッション生成と次世代への継承についての語りをもとに、理論的・概念的な知と実践知がどのように統合されるのか、個人的資質がプロフェッションにどのように寄与するのか、師との関係性がどのように変化するのかを検討した。その結果、まず専門世界に入る以前の段階として、幼児期の体験やその人の本来のパーソナリティをもとに、個人的資質が形成され、専門世界への関心の基盤となると考えられた。そして「専門性との出会い」が生じ(第一段階)、「理論的・概念的な知の習得」と「実践」を行き来しながら自己理解が深まる(第二段階)。このプロセスの中で、専門世界における「個人的資質の発見」が生じ(第三段階)、理論的・概念的な知と個人的資質、実践知の「統合」に至る(第四段階)と考えられた。

キーワード：心理臨床家、専門性、個人的資質、実践知

問題と目的

1. 理論的・概念的な知と実践知の溝

心理臨床家が扱うのは心という形の無いものである。悩み苦しむ人の心を理解し、支援するのが心理臨床家の役割であるが、その専門性を身につけるには、机上の学びだけでは不十分である。心理臨床家が職業的に自立し、専門性を形成するには、さまざまな理論や技法といった概念的な知の習得だけでなく、それを自らが心理臨床家として実践できるようになる必要がある。しかし、生身の人間関係である心理臨床の場では、教科書で学んだことが、実際のクライアントとの関係では全く役立たないこともある。ここで必要となるのは、現実のクライアントとの臨床の体験を積み重ねることで身についた実践知とも呼ぶべき力である。つまり、心理臨床家の専門性の生成には、理論的・概念的な知の習得と並行して、実践知の習得も不可欠といえる。また、理論的・概念的な知は心理臨床の実践経験なくして真に理解することが難しい。

鐘(2001)は、心理臨床の場は人と人とのかかわりを通して行われ、講義や教科書などで一般化されたものと、実際に特定の個別的な事例に出会った際に、学んだことと実際の個別例との間には大きな溝があり、このような一般性(普遍性)と個別性の間の溝をうまくうめているのが職人的な仕事であ

¹ 本研究は、2009-2012年度 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「3 専門職種における生成継承性の心理的特質と発達過程に関する研究」(課題番号 21530691、研究代表者 岡本祐子)の一部として行われた。

るとし、これを科学 science (一般性) と芸術 art (個別性) という言葉で表した。言い換えれば、私たち心理臨床家は、理論的、概念的な知と、実際の臨床現場で得た実践知を自らの内で絶えず照らし合わせ、統合する作業を行っているともいえるだろう。それでは、このような理論的・概念的な知と実践知の溝はどのように埋められ、統合されていくのであろうか。言葉で継承可能な知とそこにある経験に根ざした実践知の双方がどのように職業的アイデンティティの中で継承されていくのであろうか。

2. 個人的資質と専門家として身につけるもの

さまざまな対人援助職のなかでも、心理臨床家の専門性には、その人個人のとなりや人間観、はたまたその人が醸し出す雰囲気といった、極めて個別的で曖昧な要素が深く関与しているように思われる。

ここで他の対人援助職の一つとして、看護師を例に考えてみたい。香川 (2012) は、看護学生の学習過程において、学内学習により得られる教科書的な知と現場実践で得られる知と、その片方のみでは生じない、両者の越境と緊張関係から生じた「第三の意味 (知)」を提唱している。この第三の知は、具体的な実践状況の中で、より適切な行為を柔軟に編み出す実践知、あるいは教室で学ぶ形式知と現場の実践との葛藤や交差から生まれる両者の混種知とされている。そして第三の知の発達は、単に知識変化の過程ではなく、アイデンティティ、言語的・身体的行為の変化を含む全人格的なものとされている。

看護職は心理臨床家の専門性よりもさらに、具体的、現実的な技術面の習得が不可欠である。また、数多くの患者と関わる面でも、1人のクライアントと深く関わる心理臨床家とは専門性を異にする。そのような専門性の相違から、心理臨床家の専門性の生成には、香川が述べる第三の知とも呼ぶべきもののなかに、個人的資質の影響がより多く含まれてくるのではないだろうか。それでは心理臨床家が専門家になる以前に一人の人としてもつ個人的資質は、どのように職業的アイデンティティに織り込まれてゆくのであろうか。本研究では、心理臨床家の個人的資質が専門家アイデンティティにどのように組み込まれてゆくのかにも注目したい。

3. 心理臨床家の師弟関係

心理臨床家の学びは、スーパービジョンやカンファレンスなど、特有の師弟関係や仲間関係が見られる。これまでも優れた心理臨床家 (精神療法家) が、自らの体験をもとに師弟関係の重要性を述べてきた。

例えば成田 (2010) は、精神療法家に望まれる基本的な姿勢を良い師とめぐり会えたことで得たと述べ、自身の師との関係を振り返り、「師から直接こういう姿勢が大事だと言われたわけではないが、師の近くで仕事をし、患者やスタッフに対する師の言動を見聞きする中から、そういう姿勢がごく当然のことだとおのずかと思うようになった」と述べている。さらに、「精神療法家としての基本的姿勢を身につけるには、よい師につくことが必須のように思える」と述べた。また前田 (2008) は、心理療法と芸能の師弟関係を比較しながら、師匠 (テキスト) の真似をして、先輩の教えを取り入れるにしても、ゆくゆくは自分なりの、個性に合ったやり方に落ちついてゆくのは、芸能も心理療法も似たところがあるとしている。

このように、心理臨床の師弟関係においては、師の姿を見て学び、自らに取り込み、やがては自分の個性にあったやり方を身につけていくというプロセスが考えられる。それではこのプロセスの中で、師との関係はどのように変化し、自身のプロフェッションの生成がなされていくのか、さらに後進への指導の中で、師から学んだことはどのように継承されていくのであろうか。本研究では、心理臨床の師弟関係の変化にも注目する。

以上のことより、本研究では心理臨床家のプロフェッション生成と次世代への継承において、①理論的・概念的な知と実践知がどのように統合されるのか、②個人的資質がプロフェッションにどのように寄与するのか、③師との関係性がどのように変化するのかに注目し、検討することを目的とする。また心理臨床家のプロフェッションの変容を明らかにするために、本研究では一人の心理臨床家の専門家としての歩みを基にした事例研究を行う。

方法

対象者 川瀬啓子先生（臨床心理士、長らく大学で教鞭を取られた後、現在は私設のカウンセリングルームを開設、若手へのスーパーヴィジョンも引き受けている）。面接調査時70歳であった。筆者は対象者である川瀬先生と面識があり、川瀬先生の持つあたたかいお人柄、周囲の人からの人望の厚さ、心理臨床家としての柔らかくいて毅然とした態度に触れる機会があった。このような川瀬先生が専門家として歩んでこられた道に強く興味をひかれ、本研究を実施するにあたり、筆者から調査協力を依頼し、承諾を得た。また、面接内容を論文として実名で公表することは許可を得たうえで、面接を実施した。さらに、論文執筆後、対象者に原稿を再度校閲してもらい、家族など原稿に登場する人物に関する記載を含めて公開の許可を得た。

手続き 1回約2時間の面接を3回実施した。面接は川瀬先生のカウンセリングルームで実施した。また許可を得て、面接の内容はボイスレコーダーに録音し、後日逐語記録を作成した。面接はあらかじめ想定した質問項目と、語られた内容に応じて柔軟に対応できる半構造化面接を実施した。

調査内容は、①専門世界への方向付け・志向までの段階、②専門世界への参入（専門的訓練の始まり）から自立までの段階、③専門家としての自立・深化・拡大の段階、④次世代の育成の段階の時期ごとに、専門家アイデンティティがどのように発展したのか、また家族、師、クライアントなど重要な他者との関係性の変化などを中心に尋ねた。

データ分析 面接データの逐語記録から、専門家としてのアイデンティティ形成に関する語りを中心に、時系列ごとに整理した。

結果と考察

1. 面接内容

以下に川瀬先生の心理臨床家としての歩みを、誕生時から現在に至るまでを時系列に沿って示す。川瀬先生から実際に語られた言葉を「」で示した。

(1) 人生の原風景

川瀬啓子先生は1941年（昭和16年）に富山県に誕生された。この年、真珠湾攻撃を発端に、日本が太平洋戦争へと突入しており、日本の歴史の中でも重要なターニングポイントを迎えた時代である。富山にも1945年には富山大空襲があり、富山市の大部分を焼失するという事態に見舞われている。

川瀬先生はこのような時代に精神科の開業医の長女として誕生された。川瀬先生は4歳の時に富山大空襲を体験されており、その時の状況は今も記憶に鮮明だと言われる。また空襲により病院は消失し、建築資材もない中で診療を急いだため、戦後の一時期は自宅の生活部分と病院が同じ建物にあり、精神科医療の現場と生活の場が混然一体となった時期を過ごされた。そのため当時の精神科病院の現状を日常的に目の当たりにされている。例えば当時の主流な治療法である電気治療を受けた患者の苦悶の声が響いていたり、ひどい虐待を受けた子どもが病院に連れ込まれることもあった。病院の布団が足りない時は、自分の布団を患者に貸し出されることもあったそうである。

また、病院には自分と同学年の女の子が住み込みで働きに来ていた。同年齢の少女が働き、一方で自分は病院の娘という立場の違いは、川瀬先生の心に葛藤をもたらすこととなった。例えば、住み込みで働く少女たちと食卓を共にしていたが、彼女たちの食卓にないものが、こちらの側にはあることもあり、そういう時には「一人悶々とした」と述べられた。

「ぐっと胸つかれるような思いをするよね」「(住み込みの少女には)自分の用事は頼まない。それはもう家族全体でそう教え込まれていた。呼び名は名前を呼んでもらって、お嬢さんとかは呼んでもらわない。だけど、厳然たる事実として、かたや中学出たら働きに行かなきゃいけない、かたやのうのうとしている。感じざるを得ないよね」

このように川瀬先生の幼少期は、社会的立場の違いがもたらす現実的な厳しさを目の当たりにしてきたといえる。

高校卒業後、大学への進学を希望し、進学先として医学部を考えるが、兄がすでに医学部に進学したことで、兄とは違うところに行こうと思ったそうである。また、自宅が精神科病院であったことから心理への関心があり、東京女子大学へ進学し心理学を学ぶこととなった。このように幼少期の育ちとの連続性がある心理学に関心を寄せ、しかし兄とは別の道を志すという選択からは、自分の道を探求するという青年期のアイデンティティ形成の芽生えがうかがわれる。

(2) 師との出会い／心理臨床の原風景

故郷の富山県を離れ、東京女子大学へ進学された川瀬先生は、安保闘争や学生セツルメントなどの社会活動に参加するようになる。一方、大学では基礎的な心理学を学ぶ中で、当時非常勤講師であった佐治守夫先生と出会うこととなる。佐治先生が講義で語られる内容に興味を持たれたことから、川瀬先生は大学卒業後、佐治先生が勤務される国立精神衛生研究所の研究生の道を歩むこととなった。そしてこの佐治先生との出会いは川瀬先生にとって強烈な衝撃を残す出来事となった。これは川瀬先生が別室からマジックミラー越しに、佐治先生の面接場面を目にした時のことである。その時の衝撃を次のように語られた。

「佐治先生の面接を見た1回目が忘れられない。こういう人間同士の会話ってというのが成立するのかと思った。すごい衝撃だった」「それまでは、私にとっての人との会話ってというのは、素早く理解して、気が利いたことを答え、割とテンポよくってという感じでピンポン玉のようにやり取りをしてきたと思う。でも全然違うやり取りの会話がここにはあるんだっていうことを、そのガラス戸越しに、これは一体なんだろうと思った。なんなのかわかんないの」「とにかく私が今まで経験してきた会話の質とは違うと決定的に思った。本当にショックを受けるほど思った。その時にこれ一体何なんだろうと思ったのが、ずっと今まで続いている気がする」「あれ(佐治先生の1回目の面接)が本当の原動力だと思う」

このように面接での佐治先生のあり方は、川瀬先生に強烈な衝撃を与えている。ここで川瀬先生が感じたのは、通常の会話とは異なる心理臨床の専門性そのものであったのではないだろうか。そしてこの時の「衝撃」はまるで天啓のように言葉で言い表せないものであり、その後も「原動力」として川瀬先生の心に生き続けることとなる。

また、このような「衝撃」を衝撃として受けとめ、抱えておくことができる感性は、次の語りに見られるように川瀬先生の体験の受けとめ方の個性ともいえる。

「意識的にシャッターを押すの。そうするとあれ何だったんだろうと後から振り返れるじゃない。人生で何枚かがあるのよ、パシャッとシャッターを押して取っておいたなっていうのが。(佐治先生の面接場面も) その時の光の揺らめきだとか、これを取っておこうと思って残すみたい。イメージってそうやって残しておくんだなどどこかで思った。でもまだそういうことを思わない幼い頃の自分の体験も、絵画のように思い浮かべることがある」

同じように佐治先生の面接を見る機会を得たとしても、そこから何を感じ取り、学ぶのかといった体験のあり方は千差万別であろう。川瀬先生の語りからは、先生が一つの体験で感じとったものを、その時の感覚のまま自らの内に抱え、味わい続けることができるという資質を持たれていることがわかる。これは心理臨床を行う上でも活かすことのできる川瀬先生の個人的資質の一つと言える。

さらに佐治先生について川瀬先生は次のようにも語られている。

「佐治先生は、先に解決に向かって何かの投げかけをするんじゃなくて、言った言葉がなんかずとんとこちらの中に落ちこちていくような、何ともちょっと言えないんだけどね。とにかく大体がリズムが違った。徹底的に」

「(佐治先生は) 人間の見方がね、こういう光の当て方があるのかとか。あまり治療のプロセスだとか、こんな風に回復するとかそういうことに興味を惹かれたんじゃない気がする。心の描き方とか、錘の入れ方とか、感じとり方みたいなものにとっても興味を持った」

ここで川瀬先生が感銘を受けられた佐治先生の在り方は、心理臨床の理論的な知というよりも、佐治先生を通して目にする心理臨床の実践知とも呼ぶべきものであろう。そしてこの衝撃が川瀬先生を本格的な心理臨床の道を歩み始めるきっかけとなったのである。

(3) 仲間との歩み

国立精神衛生研究所の研究生となり、本格的に心理臨床家としての道を歩み始めた川瀬先生は、同時に精神科病院で心理検査のテスターとなり、大学の先輩である秋谷たつ子先生のロールシャッハ研究会に参加された。さらに研究所にはロールシャッハテストで著名な片口安史先生も在籍しており、川瀬先生は片口先生と卓球をして遊ぶこともあったそうである。また、順天堂大学医学部の研究生となり、当時の教授であった精神分析の懸田克躬先生の外来診療にも陪席することもあった。このように川瀬先生が学んだ環境には、日本の精神医療、心理臨床において各領域を牽引する先生方が集まり、そこから直接的にも間接的にも様々な刺激を得たのであろう。

その後、東京大学の相談室のカンファレンスにも参加するようになり、もっとしっかりと学びたいという思いから、東京大学大学院へと進学することとなった。東京大学では佐治先生をはじめ、村瀬孝雄先生、山本和郎先生らと共に学びながら、東大医学部小児科でのプレイセラピーや精神科病院でのパートを続けられた。川瀬先生が学んだ時代はまさに日本の心理臨床の黎明期であり、その中心的なメンバーとともに歩んだといえる。その中で師である佐治先生との関係は非常にフラットなものであったそうである。例えば、佐治先生は「先生」ではなく「佐治さん」と名前と呼ばせたそうである。また、仲間との関係も先輩後輩の上下の関係ではなく「仲間」という雰囲気強く、川瀬先生は心理臨床の修業時代を、自由で対等な仲間関係に抱えられながら歩んで来たといえる。ここでの関係性について、川瀬先生は次のように言葉にされている。

「みんなの中でとんでもないことを言う、若い女の子を受け入れて、議論の仲間に入れてくれる人たちがいたわけでしょ。そのことがとっても心地よいものだという経験をしているから、ずっと他者との関係はそういう風に作っていきたいと思ってる。コントロールしない関係というのをできれば保ちたいと思ってる」

この言葉からわかるように、仲間との自由でフラットな関係、コントロールしない関係は、心地よいものとして体験されただけでなく、その後の川瀬先生自身が目指す他者との関係性のあり方へとつながっている。

(4) ロジャーズの理論から受けた影響

ここでもう一つ研究生時代の興味深いエピソードがある。川瀬先生は、ロジャーズの理論をもとに、他者から見た自己と自己理解のギャップを調べる質問紙調査に協力をした際に、次に語られたような、自己受容にまつわる深い内的な変容が体験されている。

「私のことを人が明るく行動的などという言い方をするけど、実際の私はそうじゃないのと思ってた。その自分の考え方が、これは違うなどその時思った。これからは、この外に見える私にも責任を持つと思うようになった。だから、私が明るいとか、行動的ねと言われたり、優しいとか、親切ねとか言われたりすると、私はすごく居心地が悪いんだけど、そう見える、そうおっしやっていただけなら、そういう自分にも責任を持つ、それも私に違いないと思ったのよ。だからその頃ってね、今思うとほんの短い時間なんだけど、いろんなことが劇的に変わっていった時期」

これは否定していた、あるいは居心地悪く感じていた自己の側面（他者から告げられる肯定的側面）も自己の一面であることを主体的に引き受ける体験である。この体験はロジャーズの理論が単に概念的な知識として得たのとは異なる、自己変容に繋がる深い内的な理解として身に付いた体験といえるだろう。

(5) 心理臨床の道からの離れての学び

さらなる学びのために博士課程へ進学された川瀬先生に、大きな変化が訪れる。学生時代から交際していた夫との結婚が決まり、当初は東京で生活を続ける予定が、夫の転勤により、広島に移ることとなったのである。女性が結婚や出産を機に、自らのキャリアの継続性が断たれることは多くみられる。その際、キャリアの断絶をどのように受け止めるかは、その人の職業的アイデンティティはもとより、個人のアイデンティティにおいても重要な意味を持つ。川瀬先生はここで心理臨床家の道を断念し、夫について行く覚悟をしている。この体験は川瀬先生にとって積極的な意味を持つ体験として次のように語られている。

「私にとっては川瀬君(夫)と暮らすことにはとても大きな意味があったと思った。だいたい自分自身がそういう風に人間と近い距離で生きていけるとは思いもしていなかった。徹底的に自己否定的だから。私のことを好きになるとか、私と一緒に暮らそうという人が、結婚したいなんていう人が現れるはずもないと思っていた。だから一緒にやっついこうという時には、ええ！と思い、こんなこと言う人との出会いは大変なものなのかもと思い。だから臨床の仕事をしていくより、彼と一緒に暮らそうと思って、それが私に対するセラピーだったのかもね。必要だったんじゃない、そのことが。」「一緒に暮らそうなんて奇妙な関係はやってみるもんだと思って暮らし始めるわけじゃな

い、そしたら私、本当にね、相手のために私はつまらない人間で私は魅力がないとばかり言っていちゃいけないと思ったのよ。そんなつまらない女房と暮らす相手は気の毒だと。それで unnecessary 卑下はしないと思うようになった。少なくとも、とっとも消耗な、非生産的な自意識の過剰な回転、ぐるぐる回りからだけはずいぶん脱却しやすくなった気がする。その物語の中からね」

このように自分を認めてくれる夫との結婚は、川瀬先生自身の自己受容へとつながっていく。しかし一方で、心理臨床の道を半ばで離脱することは、専門家として生きることを諦めることでもあった。

「心理臨床学会が立ち上がる現場を見ていた。みんながワーツと熱いスープ鍋の中にいるような、そんなところにいるじゃない。でもそのまま私は、広島に移ってしまって、皆さんの成長や葛藤をその後見ていない。私はその後しばらく仕事から遠ざかってしまった。その時は中途半端でこれは終わるんだなと思い、だから二度と臨床の現場に戻る資格はないと思ってやめた。川瀬と一緒に生きていきたいと思いますかと選択して、広島に移ってきたから」

「心理学というのにも、臨床の世界にも、いかにも修行の始まりの時でないから。またね、私はそれをやっていた、勉強しておりましたという顔でクライアントの方に会うことはできないなという風に思った。だから違ったところで自分が生活していく覚悟がいたと思ってきた」

このように、心理臨床の道の半ばに東京を離れることは、川瀬先生にとって以後専門家と名乗ることはできないという覚悟を生じさせた。このエピソードが語られた際、否定的にでもなく、後悔するでもなく、ただ一つの事実として淡々と語られたのが印象的であった。キャリアが途絶えることに対して、単に受け身に身を任せたのではなく、その時の自分に必要な道を選択したという主体的な姿勢が、現在の自然な語りにつながったのであろう。

そして興味深いことに、この時の選択が心理臨床の道をただ一本ひた歩むのとは異なる、多彩でユニークな人生へと展開していくことになる。川瀬先生はその後、専業主婦、フリーランスのコピーライターとして広告文作成をすることとなる。3人の子どもを育てるなか、夫の転勤が続き、アメリカ、広島、名古屋、滋賀、そして再び広島へと引っ越しが続いた。その後、夫が単身赴任となり、川瀬先生は広島に子どもとともに残ることとなった。そして、短大の保育科で非常勤講師をした後、42歳からは常勤の大学教員となり、教育の場で臨床心理学を教えることとなった。

「私の生活パターンから、自分の思い描いていたような臨床の現場での仕事はできないと思った。大学院生時代周りの人たちは、本当に遅くまでカンファレンスをしたり、身を粉にして、自分の時間のほとんどを捧げて仕事をするというイメージだったから。これは私はちょっとできないなと思った。けれど、自分で選択したことは何とかのせいだとは言わないことにしてる。私はどういう時間の使い方をして、どうやっていくかは自分で決めるんだから、私はこちらの、とにかく臨床の現場で仕事を見つけて何かの形で切り開いていくというのではなくて、こちらの教えること、こちらから自分が選んだという思い」

このように、川瀬先生は心理臨床の道を離脱したことに忸怩たる思いを持ちながらも、師や仲間がしていた身を粉にして、自分の時間を全て捧げて仕事をするというスタイルとは違う生き方が選択されている。また、フリーライターとしての仕事も、川瀬先生の臨床観に影響を与えることとなる。以下はフリーライターとして広告代理店の下請けをしていた時のエピソードである。

「企業に広告代理店の人と一緒に行くと、広告代理店の人をスポンサーがぼろくそに言う。『大変ですな』と申し上げたら、『そんなこと言ってくれるな』と。優秀な人が言われればなしになって反論もしないでいる。その人は仕事というより強いアイデンティティで納得しているのだから、なぐさめることはかえって失礼なことでも何の役にも立たない。だからクライアントの方たちというのは、様々な挫折をしたり、思いのままにならなくて生きてるんだけど、それを気の毒だと思う必要も無ければ、淡々と見ておくことの方が大事だし。本当にその人の誇りというのは、そういう風に助けられるところにあるのではなくて、そんなことを言われようと、自分はこうやっていくんだというのを見ていて欲しいんだろうし。そこのところで仲間になって支援して欲しいんだと思う」

これは求めて得た体験ではないにも関わらず、川瀬先生の人間観に影響を与えることとなったエピソードである。ここでの気づきが人間の誇りとは何か、人が人を支えるとはどういうことかという臨床観にもつながり、そしてまた、幼少期に体験した葛藤への答えにもつながる視点といえるだろう。

(6) 再び心理臨床の道へ

その後、川瀬先生は勤務先の大学での学生相談活動や臨床心理士養成大学院の教員として、再び心理臨床の現場に戻り、後進を育てる立場となった。川瀬先生は院生の実習先での心理検査の指導にあたり、ロールシャッハの講師を招いての講習会を開催されている。ロールシャッハの指導では、自らが学んで来た片口法ではなく、これからの時代を見据えてエクスナー法を選択したと言われた。

「片口先生自身を存じ上げていたから、亡霊にしがみつこうようにテキストに従っていたら、片口先生自身のパーソナリティと随分違うような気がする。(片口先生は) すごく自由闊達なところがあった。大変な勉強家で。世の多くの場合は、大して勉強もせず、ここにこう書いてあるというのを鵜呑みにしてやっていくでしょ。でもそれじゃ片口先生の意に添わない。あの本は当時の最先端だけど、それを信じるがごとくやるというのは、あれだけ勉強する人のそれこそスピリッツに反するでしょうという感じだった」 「(エクスナーを) 入れ込んで勉強するつもりも時間もなかったから、基礎や何かはそれの専門の人にしてもらった方がいいというのが一つと、せっかく専門にしている人がいて、だから、少しでも伝承、心理の特別な領域として伝承ができた方が良くないかと思う。それならば一生懸命やっている人に大学院生に話すチャンスをとった」

「(検査を教える際には) 同時にこの人が持っている力って何? 資源って何? て、そのことを必ず見つけてねというのは、言ってきたつもりなのね。そういうことで医者から面倒くさがられるとか、報告文が長過ぎますとか言われようが、書くべきことだけはちゃんといつも伝えておくと、臨床心理の人ってこういうものの見方や言い方をするのかってある種学習してもらえる。何をあなたは臨床心理でやっていけるのかを考えていこうねって。それを読んでね、何か腑に落ちてもらえればいいんだから。私もそうやって秋谷先生から教えられてきた。とても及ばないけれど」

ここで川瀬先生が後進に伝えようとしているのは、自らが親しんできた片口法という技法の継承ではなく、「片口先生のスピリッツ」であり、心理臨床家の専門性である。そして、後進が自分の技術を伝える場を提供するという役割を担われている。これは個人のプロフェッションの継承ではなく、自分を通過点として、心理臨床の本質が継承されることを願われての行動といえるだろう。

さらに大学在職時には院生へのケースの指導や個別のスーパーヴィジョンを引き受ける際の自身の心構えが次のように語られた。

「(院生への指導は) ここでこう感じてこうしてるんだよね、あなたがこうしていることを向こうはどう思ってるみたい? というプロセスの検討みたい」

「(ヴァイジーがスーパーヴィジョンの結果) 自分がどう考えているか、どう感じているかということに関してはより率直になっていくような気はする。私にとってはどんな見方でも、『へえー、そんな見方。おもしろいね』ってなるわけじゃない、話を聴いていたらね。(ヴァイジーは)『えー、いいんですか、そんなで』と言いながら、一般に元気になっていくような気はする。少なくとも、クライアントの人に会ったり、自分でケースを考える時に、より自由に、なるべく正直に、自分の思っていることや、何かを一度とにかく取り出してみるということはしやすくなってないかなと期待している」

「スーパーヴィジョンをする時に何を伝えるかというのは、前例みたいなものに囚われないように、自由な発想をするように、それにつきる」

この語りにみられるように、心理臨床家が自由であること、自分自身に率直であることが川瀬先生の後進を育てる姿勢のベースとなっている。これは川瀬先生が佐治先生から感じとってきたもの、さらにロジャーズの姿勢と重なり合うものである。

(7) 現在の臨床観と個人的資質のつながり

現在に至る川瀬先生の臨床観や、ロジャーズの理論から受けた影響については次のように語られた。

「セラピーの一つの仕事は、自分が多様化していくことだと思ってる。だから、私が相手に言うのは、『あなたの語ってる時に、あなたはこんなことを言ってくれたけど、同時に私はこんなことを感じながら聞いてたよ』という風に言うわけだから。だからほとんどの時間は、『あなたこんな風に思ってるのか』といわゆる共感的な受け答えをしているけれども、『ちょっと待って、でもその時あなたこんなことも言ってるような気がするんだけれども』みたいなことは言ってきたように思うね。それは私にとって真実だから、リアルなことだから。それが必ずしもいつも、プラスのことばかりではないのよ」

「多様な自分を見つけていくということはいろんな人がいろんな言い方をしていると思うけど。そういうのはそう感じとってきたかもしれないし、私自身の好みかもしれない」

「私は一番ロジャーズに啓発されたし、触発されたし、今もそう思うけど、今も読み返して思うのはロジャーズのいろんな論文だから。彼は自分は一致していなきゃいけないと言うでしょ。真実であれば、他の人が、私がどう思ってるかを感じていることを透明性を持って見ることができ、隠されていることが無い、そういう人と出会っている時に、本当に安心して自分の中を出し始めることができるんだ、そういう言い方するじゃない。だから、最初からやっぱり私が感じているものも、絶えず吟味するよね。私の思い込みかなとか、偏見かなとか。でもどこかでそれを率直に伝えることが仕事だと思ってる。ロジャーズが言う自己一致というのは、私がこの人と会ってる時にどう感じているかと考えることだと思ってるから」

このように、ロジャーズの自己一致や純粋性を自身にも絶えず問いかけ、そして後進を指導する際にも、後進の自己一致や純粋性を促す関わりがなされている。この自己一致や純粋性を問いかけることは、川瀬先生自身の心理臨床家としての深化としても次のように語られた。

「私が出会ったセラピストの多くはclient centeredだから、評価から自由で、評価をしなくても自分たちの関係に安定性と自信を持ってやってる人が多かったと思う。だけど私はそのところがだめだなと思ってきた。私は自分がその人から感じとる肯定的な面を、相手にちょっと過剰に念押ししたり、伝えたりしたい。『でもこんなことでできてよねと思ったよ』と言ったり。でもそうすると、それはまだその方自身の言葉にはなりきれないものを書いてしまう時がある。そうすると自分の押しつけのつもりではないんだけど、失敗することがある。私の失敗はほとんどそれだと思う。修業時代だし、今でも続く私の傾向だと思う。それが経験の中でどんな風に修正して来れたかという、(自分の関わりが)行き過ぎたかなとか、こんな風に言うとかえってこの人には受けとりにくいんだと思う時には、『なんか私ちょっと一人で考えすぎたかな』とか、『ちょっと先走りすぎたかな』とか、そういう風に修正できるようには前よりはなってきたと思う」

「(自分が)そういう傾向なんだと、折に触れて立ち止まって、自分で吟味しなきゃいけないと思ってる」

目の前にいる人を励ましたい、勇気づけたいと思うことは心理臨床家ならずとも人として自然な欲求であろう。しかし、心理療法においては時として励ましや肯定的評価が治療的な意味を持たない場合もある。川瀬先生は他者に肯定的な言葉をかけたいという自分の傾向を自覚し、それを常に吟味しながらクライアントと関わり続けている。このように専門家を志す以前の対人関係の持ち方など個人的資質は、実践を通して自覚され、吟味されることを通して、専門家としてのあり方が確立されていくといえる。

また、個人的資質と心理臨床のつながりについて次のように語られている。

「私は熱い心で面倒見が良いというタイプじゃないのよね。親身にはなるけど、距離感がありながら親身になるというか。私がずっとカウンセリングを続けてきたというのは、そういう特質もこの関係の中でなら生きるかなという感じがしてるの。本当に熱くて、心が優しくてだったら、もっと直接的なケアの世界とか、教育の世界とかね」

「佐治先生のプレゼンスは、私もそれを目指せばいいんだという励ましにはなったよね。ありがたいことにそんな感じはする」

生家が精神科病院という直接的なケアの世界で育ってきた川瀬先生が、その世界に身を置くのではなく、一定の距離を保ちながら心のありように焦点を当てる心理臨床の世界を歩んだのである。言いかえれば、川瀬先生が自身の資質を生かした道を選択したのだ。そして、そうした個人的資質と佐治先生のあり方に共通する部分を垣間見たことが、自分のあり方を受容することにつながっている。

(8) 原風景の中に還る

川瀬先生は大学を定年退職後、私設のカウンセリングルームを開設されている。そこでは大学の卒業生のスーパーヴィジョンを引き受けることもある。ここでの体験は、「いつも楽しい。私が経験しないこと、私じゃないやり方をみんな見せてくれるじゃない。それがとてもありがたい」と語られ、後進から自分が学ぶという姿勢を持たれている。

また、心理臨床の道から一旦離れることは、当時の自分にとって主体的な選択ではあったものの、いつかまた臨床の場に戻ることが川瀬先生の望みでもあったと言われる。そして私設のカウンセリングルームを開設したことについて次のように語られた。

「学生相談の場があり、学生たちの成長は楽しかった。しかし、大学での仕事の一部であり、そういう人間がおめおめと臨床心理士だなんて思ってた。それはずっと続いていたから、退職したら細々とでいいから、どっぴりと臨床の場所を作りたいと思った。」

「私、プレイセラピーって何なのか、今とっても疑問なのよ。すごい効果があることは、私たちはわかってるよね。ほとんどが人間関係だと。プレイセラピーの部屋の設計も、部屋の中にどんなおもちゃを置か、それがどんなセラピーの効果があるのか、何もかもよく吟味されないままに、子どもが遊びそうなおもちゃが置かれてるよね。だから、ちゃんと考えてみたい、やってみみたいなという思いがあった。その時には、みなさんトレーニングの場が必要だから、利用して下さったら良いなと思ったんだけど。遊具もすごく身近ななんかちゃん人形とかではなくて、ある種不自由な品揃えで、子どもたちが何かを象徴的に始めるような状況が作れないかと思ってる」

「イニシャルケースも摂食障害。2ケース並行してやっていたが、ふっくらして、自分を取り戻し、元気になって学校に行くようになった。何がうまくいったんだろうと思う。(当時は)女性性の否定や成熟拒否の理論しかなかったと思うのよ。中学の子を見ていて、女性性がどうというよりも、とても自分のことを持て余し始めたというのはわかるのよ。身体は変化していくし。それから一人の子はとても難しい学校に入ってしまった、押しつぶされてベシヤンとなってしまった。若い頃の私はそういうのがとてもよくわかったんじゃないかと思う。拒食の子たちは短期間で変わった。医局でお医者さんに、『あなたどういうことしたんですか?』と聞かれるけど、『どうしたんでしょう』という感じ。教育相談室で先輩と組んで主にプレイセラピーを担当した。どこかでまたそこに復帰したいという気持ちはあった。あの頃していたプレイセラピーって一体なんだったんだろうと思って」

ここにきて川瀬先生がしようとしていることは、まさに心理臨床の道の始まりから抱き続けた疑問を探求することである。今探求されようとしているのは、心理臨床を志してまだ始めの頃に生じた体験の吟味である。これは専門家となる以前から持つ川瀬先生の資質が色濃く出ていた時期なのかもしれない。専門的なさまざまな知識を身につけた先に、最後に残った疑問が、専門家になる前の原初的な体験にあるといえるだろう。

そして、佐治先生から受けたはじめの衝撃は今も川瀬先生の中で原動力として生き続けている。

「私臨床をやって、私自身が成長した部分は本当に大きいんだと思う。こういうコミュニケーションがあるんだという驚きは未だにちゃんと説明できないように、その時のむしろ肌で感じた、身体で感じた衝撃の方を、いつもそこを忘れないで、あれはなんだろうって振り返って味わい直すことができるから、そう、ちょっと未分化なままで置いておこうかなというのもないわけじゃないんだけれども」

2. 総合考察

最後に、川瀬先生の心理臨床家としての歩みをもとに、心理臨床家のプロフェッションの生成と継承について考察する。

(1) プロフェッションとの出会いと個人的資質

川瀬先生の心理臨床家の歩みは、佐治先生との出会いから始まっている。そして、初めて佐治先生の面接を見た時の衝撃がその後の「原動力」となっている。川瀬先生にとって、おそらくこれは心理臨床のプロフェッションを初めて目にした体験であろう。佐治先生の関わりがこれまでの自分が

知っている対人関係とは決定的に質が異なるものであることはわかっても、それが何なのかはまだわからない。私たちは芸術や美など、本物の何かに出会う時、言葉を失ってしまう。それと同じようにこの衝撃は、言葉を持たない全人的な体験であり、川瀬先生にとって心理臨床の道の原風景と呼ぶことができるだろう。この時、師は自分の未だ知りえぬ専門性を持つ存在である。そして専門性の本質に触れ、それに直観的、感覚的に感銘を受けるが、理解はできず、言葉にすることができない。しかし、この専門性は完全に自己と異質なものでないであろう。川瀬先生も、佐治先生のあり方と、ご自身の個人的資質の共通性を垣間見られている。この段階においては、専門家として歩む中でいずれ発見される自己の個人的資質が、師の専門性の中に隠れているともいえるだろう。

さらに個人的資質と専門性について川瀬先生の語られた中に、心理臨床特有の人との距離の取り方の中でなら、自分の特質をいかすことができるように感じたという言葉がある。このように専門性を身につける中で、自らの資質をその専門世界で活かすことができるという感覚を得ることは、非常に重要な感覚である。この感覚を持って初めて、専門家としての道を、自分の人生の中に連続性を持って位置づけられるようになるのではないだろうか。

(2) 時代への所属感と黎明期の熱気

川瀬先生が学んだ時代はまさに日本の心理臨床の黎明期である。人はどの時代に生を受けるかを選ぶことはできない。しかし、自分が生きた時代への所属感、個人のアイデンティティ形成において重要な意味を持つ。熱気に溢れる心理臨床の黎明期に修業時代を過ごされたことは、川瀬先生自身にも強く影響しているように思われる。また、この時代の仲間とのフラットな関係の心地よさは、川瀬先生自身が他者との関係を築く際の姿勢へとつながっている。フラットな仲間関係というのは、佐治先生の個性はもとより、みなで協力して一つの専門職を構築していく時代の特質もあったように感じられる。

ここで日本における心理臨床家の歴史的な流れを概観したい。乾(2003)は、日本における臨床心理士養成制度を次の四期に分けている。第一期：個人的努力に委ねられていた準備の段階(1980年以前)、第二期：臨床心理士認定と養成制度の基礎構築の段階(1980-1995年)、第三期：社会的要請と養成制度の拡充の段階(1995-2001年)、第四期：新たな養成制度の発展の段階(2001年から)である。川瀬先生はちょうど、日本で心理臨床家が専門職として位置づけられる準備段階、そして基礎構築段階をその中心的メンバーとともに過ごしてこられたといえる。乾(2003)はこの時期を振り返り、「たいへん勉強熱心で、少数ではあったが臨床心理を真剣に学び、我が国に位置付けたいと願う今日の先達たちがいた。そのなかから個人的で独自性を持った臨床心理専門家も多く排出されている」と述べている。ここには、ある専門家集団の黎明期にしか作り出せない熱気や理想、情熱があるように思う。そして、自らがその時代を生きた人には、意識的、無意識的にも後進への継承にその体験が影響を与えるであろう。たとえば川瀬先生も後進への指導の際に、心理臨床家の専門性が他職種に伝わることを意識されたり、「片口先生のスピリット」の継承を望まれる姿勢が見られた。ここには、黎明期の熱気を知る人だからこそ、個人的な意味よりも、より本質的な意味で心理臨床家の専門性の発展、継承を望まれる気持ちが表れているように感じられる。このように、その専門職の歴史の中で自分がどの時代を生き、何を次世代につなぐ役割を持っているのかという展望が、個人として後進に指導する際のあり方にも影響を与えられよう。

(3) 理論的・概念的な知の内包と継承

修業時代に川瀬先生はロジャーズの理論をもとにした質問紙調査を体験することで、他者から見た自己も自己として受容していこうという姿勢へと変わっている。また、夫との結婚により、自己

卑下的な自分から脱却するという変化が見られた。これはロジャーズ (Rogers, 1951 保坂・諸富・末武 訳 2005) が述べる「よりすぐれた自己受容」と呼ぶことができるだろう。ロジャーズは、自己受容により、自己の構造が自己と一致していなかった感情を受け入れられるほど拡張し、より多くのものを包含できるようになること、それにより、より柔軟で認識力の高いものとなり、防衛的な傾向が減少すると述べた。このロジャーズの述べる自己受容や自己一致のプロセスを、川瀬先生は自らの内的世界で身をもって体験されていく。これはまさに、理論的・概念的な知が、個人的な体験として内包され、実感されたものであろう。

心理臨床の理論は具体的・現実的な水準から、言語的表現がもはや不可能ともいえるような心の深層に関するものまで幅広い。初心者にとっては、一読しただけでは理解できない理論も、様々な実践を伴った後に再び触れると、もう一段階深く理解できる、あるいは初めて真に理解ができるということも少なくない。このような概念や理論と、実践や実人生でつかんだ感覚を常に照合しながら、先達の真意を汲んでいくというプロセスが専門性の深化には欠かすことができないのではないだろうか。

また川瀬先生が後進への指導で伝えようとしていることには、自分が学んだ技術や知識の伝達を目指すのではなく、その人自身の自己一致を進めるような働きかけが目指されている。このことは、クライアントだけでなく、心理臨床家自身も自己理解を深めることを重視するロジャーズの姿勢が川瀬先生の内に根ざしているからではないだろうか。そして、川瀬先生が理論的基盤としてきたクライアント中心療法の特徴は、後進への継承においても個人の資質を重視するあり方として認められる。さらに言えば、ある技法に感銘を受け、身につけるということは、その技法を継承する段階においても、その技法の特徴が現れると考えられる。つまり、より具体的・現実的な技法を持つ学派では、継承されるものもより具体性が帯びてくる可能性が高い。今後、学派や技法による継承のあり方と、学派を超えた共通性を検討することが、心理臨床の専門性の理解において重要であると考えられる。

(4) おわりに

ここまで一人の心理臨床家の歩みをもとに、心理臨床家のプロフェッションの生成と継承について述べてきた。そのプロセスは次のように大きくまとめることができるのではないだろうか (Figure 1)。まず専門世界に入る以前の段階として、幼児期の体験やその人の本来のパーソナリティをもとに、個人的資質が形成される。そしてこの個人的資質は専門世界への関心を生むこととなる。そこで第一段階として「専門性との出会い」が生じる。川瀬先生にとっては、それは佐治先生の面接を初めて目にした体験であろう。この段階では、先人が体現している専門性に感応するが、それはまだ理解することができないものである。この時感応した専門性は個人的資質を圧倒するものであり、私たちはそれを理解したい、身につけたいという欲求に駆られる。

そのようにして専門世界に足を踏み入れることで第二段階として理論的・概念的な知の「習得」がなされ、同時に「実践」が始まる。そして実践での生身のクライアントとのかかわり、ケースカンファレンスやスーパーヴィジョンを通して、自己の対人関係のあり方など、個人的資質がまざまざと現れることとなる。これが第三段階の個人的資質の「発見」である。この段階で発見される資質は、それまで自覚されなかった自己の側面であり、それが統合されるまでが心理臨床家としての歩みの中でも一つの危機の時期と言えるだろう。そして、個人的資質に気づき、受け入れ、専門家としてのあり方との間で吟味されることで、次第に個人的資質の専門世界での「活用」がなされるようになる。ここで理論的・概念的な知は身を持って体感されるものとなり、自分の言葉として専門性を語る事が可能になる。

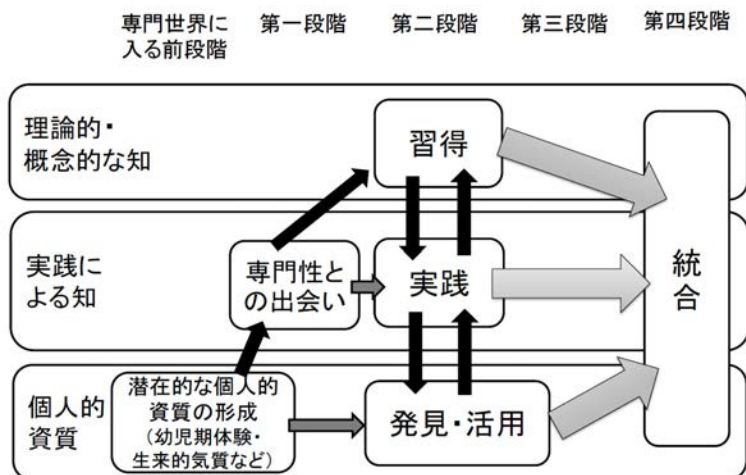


Figure 1. 心理臨床家のプロフェッション生成のプロセス

そして第四段階である、理論的・概念的な知と個人的資質、実践知が「統合」された状態が、心理臨床家の専門性の成熟した状態と呼べるのではないだろうか。ここでは個人的資質は抑え込まれるものではなく、また理論的・概念的な知は個人的資質に沿ったものを軸とし、自らの体験と照らし合わせた血の通ったものとなる。そして専門家としてのあり方の中でそれぞれが自由に活かされることができる状態となる。川瀬先生の語りから筆者が感じたことは、成熟した心理臨床家のあり方とは、このように「理論的・概念的な知」「実践知」「個人的資質」の三つが循環しながら、柔軟に変化していくという状態である。

最後に、心理臨床家の日本での専門職としての歴史はまだ発展の途上にあると言える。専門集団としての歴史性の段階により、求められる専門性や教育の課題も異なってくるであろう。今後は他の対人援助職との比較なども通して、幅広い視点から心理臨床家のプロフェッションの生成と継承について検討していきたい。

謝辞

本研究にあたり、貴重なご経験をお話いただいた川瀬啓子先生に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 乾 吉佑 (2003). 日本における臨床心理専門家養成の展望と課題 心理臨床学研究, 21, 201-214.
- 香川秀太 (2012). 看護学生の越境と葛藤に伴う教科書の「第三の意味」の発達—学内学習—隣地実習間の緊張関係への状況論的アプローチ— 教育心理学研究, 60, 167-185.
- Rogers, C. R. (1951). *Client-centered therapy: Its current practice, implications, and theory*. London: Constable. (ロジャーズ, C. R. 保坂 亨・諸富祥彦・末武康弘 (訳) (2005). ロジャーズ主要著作集 2 クライアント中心療法 2005 岩崎学術出版社)
- 前田重治 (2008). 図説 精神分析を学ぶ 誠信書房
- 成田善弘 (2010). 精神療法面接の多面性—学ぶこと, 伝えること— 金剛出版
- 鏑幹一郎 (2001). スーパーヴィジョンの意義と課題 鏑幹一郎・滝口敏子 (編) スーパーヴィジョンを考える 誠信書房 pp. 3-12.